

よりよい合意形成ができる力を育む学級活動

～議題の選定及び小集団での話し合い活動の工夫を通して～

みやま市立水上小学校
教諭 須崎 恵実

こんな手立てによって…

○切実感のある議題の選定と事前の指導
○小集団での話し合い活動の工夫

こんな成果があった！

○目的意識を持ち、主体的に話し合い活動に参加することができた。
○少数意見や多様な意見を生かした、よりよい合意形成ができるようになった。

1 考えた

今日、学校教育課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習が重視され、問題解決学習や体験学習等の必要性が求められている。自分の所属する集団や集団での生活に関心を持ち、生活をよりよくするための課題や解決方法を見だし、解決に向けて積極的に集団に関わる自主的・実践的な学級活動を活性化していく必要がある。しかし、目標や課題を意識した行動がとれず、自分たちの生活の中から問題を見つけたり、具体的に何をすればよいのか考えたりすることができる子どもは少ない。そこで、本研究では、学級目標達成に向けて学級全員が主体的に話し合い活動に参加し、よりよい合意形成ができるようにするために、「切実感のある議題の選定と事前の指導」、「小集団での話し合い活動の工夫」に取り組むことにした。

2 やって見た

実践1「地域のお年寄りとおふれ合える祖父母交流会にしよう」では、学校行事との関連を図って議題を選定し、実践3「1年生と楽しくおふれ合える会をしよう」では、議題箱の提案カードから議題を選定した。2つの実践ともに、出し合う段階では、考えを広げたり深めたりするために、同じ考えの友達同士で話し合う場を設定した。くらべ合う段階では、互いの考えのよさを知り、よりよい合意形成につなげるために異なる考えの友達と話す場を設定した。実践2「6年生に近づくためにステップアップ作戦に取り組もう」では、議題箱の提案カードから議題を選定した。出し合う段階では、自分の考えのよさを主張し合い相手を説得するために、異なる考えの友達と話す場を設定した。くらべ合う段階では、相手を説得する方法を考えたり、違う考えのよさを確認し合ったりするために、同じ考えの友達と話し合う場を設定した。その結果、自分にもみんなにもよい決定をすることができた。

3 成果があった！

授業実践を通して、切実感のある議題の選定や、話し合い活動につながる事前の指導の工夫を行ったことで、目的意識をしっかりと持ち、話し合いの3つの観点や提案理由に沿って主体的に話し合い活動に参加する姿が見られた。また、小集団での話し合い活動を意図的に仕組んだことで、学級の一員として積極的に話し合い活動に参加することができ、よりよい合意形成ができる力の育成につながった。

よりよい合意形成ができる力を育む学級活動

～議題の選定及び小集団での話し合い活動の工夫を通して～

1	主題設定の理由	3
	(1) 社会の要請から	3
	(2) 本校の教育目標から	3
	(3) 児童の実態から	3
2	主題の意味	4
	(1) 「よりよい合意形成」とは	4
	(2) 「よりよい合意形成ができる力を育む」とは	4
3	副主題の意味	5
	(1) 「議題の選定の工夫」とは	5
	(2) 「小集団での話し合い活動の工夫」とは	5
4	研究の目標	5
5	研究の仮説	5
6	研究の内容と方法	5
	(1) 切実感のある議題の選定と事前の指導	5
	(2) 小集団での話し合い活動の工夫	6
7	研究の構想	7
8	研究の実際と考察	8
	【実践1】「地域のお年寄りとふれ合える祖父母交流会にしよう」	8
	【実践2】「6年生に近づくためにステップアップ作戦に取り組もう」	13
	【実践3】「1年生と楽しくふれ合える会をしよう」	19
9	全体考察	23
10	成果と課題	25
	<参考文献>	25

よりよい合意形成ができる力を育む学級活動

～議題の選定及び小集団での話し合い活動の工夫を通して～

みやま市立水上小学校
教諭 須崎 恵実

1 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

近年、子どもたちを取り巻く環境は、ネット社会の進展により豊かになった一方、コミュニケーション能力や人間関係形成力の低下や生活経験の不足が懸念されている。そうした中、学校教育では、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習が重視され、問題解決学習や体験学習等の必要性が求められている。そのためには、自分の所属する集団や集団での生活に関心を持ち、生活をよりよくするための課題や解決方法を見だし、解決に向けて積極的に集団に関わる自主的・実践的な学級活動を活性化していくことが必要である。そして、学級全員が共通した目標に向かって、思いや願いを持ちながら、計画を立て話し合い、実践し、振り返る経験を積み重ねていくことが大切である。

本研究において、本校の裾野教育の重点チャレンジ体験である、学校行事と関連させた学級活動(1)の取り組みや生活の中での諸問題を解決しようとする中で、話し合い活動を通してよりよい合意形成をする経験を積み重ねていくことが重要である。このことは、子どもたちが自ら生活をよりよくする方法について考え、生活を向上させようとする態度を身につける上からも意義深い。

(2) 本校の教育目標から

本校の教育目標は、「郷土を愛し、自ら意欲的に学び、豊かな心とたくましく生きる力をもった子どもの育成」であり、「郷土愛」「知恵」「社会性」「健康」「挑戦力」を持った子どもの育成を目指している。これを受けて重点目標は「友達と話し合い、考えを深める子ども」とし、子どもにとって切実な目標や課題の解決に向けて、友達の考えと比較しながら聞き、自分の考えを論理的に説明したり、話し合いによって深まった考えを書きまとめたりすることができることを目指している。

そこで、重点目標の具現化に向けて、本主題を設定し、話し合いの知識や技能を身につけさせ、話し合いの質的な向上を図るとともに、多様な意見の良さを生かし、よりよい合意形成ができるようにしたい。このことは、子どもたちの「社会性」や「知恵」の育成及び「挑戦力」を育むことにつながるものと考えている。

(3) 児童の実態から

本学級の児童は、男子13名、女子16名の計29名（内1名は特別支援学級在籍児童）

で、明るく素直な子が多い。5年生になり、「6年生のように頼られる存在になりたい」という思いを持ち、『ひかりかがやけ！5年1組』（ひ：一人一人が主役，か：考えて行動できる，り：りっぱな姿）という学級目標を設定した。子ども達の意欲は感じられるが、目標や課題を意識した行動がとれず、自分たちの生活の中から問題を見つけたり、具体的に何をすればよいか考えたりすることができる子どもは少ない。話し合い活動では、発言をする子どもが固定化されており、自分の考えを書けない子どもや書いていても発表しようとしないう子どももいる。また、自分の考えに固執し、相手の考えを尊重したり生かしたりすることができていない。これは、議題が子ども達にとって学級目標達成に向けた切実な問題でないこと、話し合いをして合意形成を図る過程で自分の意見が大切にされているという自己有用感を味わうことができていないことが大きな要因であると考えられる。そこで、子ども達にとって切実で話し合う価値のある議題を設定し、話し合う過程で自分の意見が大切にされているという実感を味わわせることで、自分達で生活を向上させていこうとする自発的・自治的な態度が身に付くと考える。

2 主題の意味

(1) 「よりよい合意形成」とは

合意形成とは、学級全員が自他の意見を尊重しながら話し合い活動に参加し、一人でも多くの人の意見が生かされて、みんなも自分も納得いくようになされる決定ととらえる。安易に数的に優位な意見に決定しようとするのではなく、すべての子どもが学級目標達成に向けて多様な考えを出し合い、折り合いをつけながら学級としての考えを決定していくことである。

(2) 「よりよい合意形成ができる力」とは

よりよい合意形成ができる力とは以下のように考える。

- ・自分の考えを持ち、主体的に話し合い活動に参加することができる。
- ・友達の考えを受容的に聞き、建設的な意見を述べることができる。
- ・少数意見や多様な意見を生かし、みんなも納得のいく決定をすることができる。

学級活動(1)における合意形成は、学級全員の願いや思いを持って実践されるものであるため、単なる同意ではなくかなりの重みを持つ。よりよい合意形成ができる力を育むためには、学級目標達成に向けた切実な問題を議題として設定することが大切である。また、「出し合う（互いの意見を知る）」「くらべ合う（他者との違いを理解し、自分の意見を修正する）」「決定する（合意点を見つける）」の三つの段階を踏まえて展開し、多様な意見を生かしたよりよい決定ができるようにする。

〈本研究で目指す子どもの姿〉

- 学級を向上させるために主体的に話し合いに参加することができる子ども。
- 友達の考えを受容的に聞き、少数意見や多様な意見を生かす建設的な話し合い活動ができる子ども。

3 副主題の意味

(1)「議題の選定の工夫」とは

学級や学校を良くしていこうという前向きな姿勢を生み出すためには、子ども達にとって必然性のある議題を選定することが大切である。議題の選定の工夫とは、学級のみんなに関係があり、決めたことを具体的に実行できる議題や、目的意識を持って話し合うことのできる切実な問題を議題として設定することである。本研究においては、学校行事（チャレンジ体験活動Ⅱ）との関連を図ること、議題箱を設置し議題箱に提案された内容から議題を選定することとする。このことで、全員が納得してよりよい合意形成につながる話し合い活動が実現できると考える。

(2)「小集団での話し合い活動の工夫」とは

話し合い活動とは、他者の考えを聞くことで自分の考えを確かなものにしたり、足りないところを補って新たな考えを創り出したりする場であると考え。小集団での話し合い活動の工夫とは、自分たちの問題を自分達で話し合っ解決していくために、全員が主体的に話し合い活動に参加できるよう小集団で話し合う場を仕組んでいくことである。具体的には、「どんな小集団にするか」、「どんな場面で小集団にするか」、「どんなことを話し合うか」を意図的・計画的に仕組むことである。全体場で話すのが苦手な子どもは、自分に自信がなかったり、自分の考えを聞いてもらって認められたという経験がなかったりすることが多い。せっかくよい考えを持っていても、発言できなかったり、友達の意見に流されてしまったりする。そこで、3～4人の小集団で話し合う場を設定することで、一人一人の意見が大事にされ自己有用感が高まるようにする。また、一つでも多くの知恵を出し合っ合意点を見つけることで、よりよい合意形成につながる話し合い活動が展開される。このように、話し合っ決定したことを実践していく中で、集団の一員として自分たちの学級や学校の生活をよりよくしていくことができたという達成感や充実感を味わわせることができると考える。

4 研究の目標

学級活動(1)において、よりよい合意形成ができる力を育むための、議題づくりと小集団での話し合い活動の在り方について究明する。

5 研究の仮説

学級活動の指導において、以下のような手立てを設定すれば、子ども達一人一人が主体的に話し合い活動に参加し、よりよい合意形成を行うことができるであろう。

- (1) 切実感のある議題の選定と事前の指導
- (2) 小集団での話し合い活動の工夫

6 研究の内容と方法

(1) 切実感のある議題の選定と事前の指導

- ①学校行事（チャレンジ体験活動Ⅱ）との関連

学校行事は、教師が意図的、計画的に実施するが、必要に応じて児童の意見・発想を効果的に取り入れることで、児童の自主性を育むことができる。様々な特性を持つ学校行事との関連を図り、切実感のある議題を設定することで、集団への所属観や連帯感が高まると考えられる。そこで、年間指導計画をもとに学校行事（チャレンジ体験活動Ⅱ）と学級活動(1)との関連を図る。

1 学期	運動会, 宿泊体験学習
2 学期	陸上記録会, 祖父母交流会
3 学期	学習発表会, 6 年生を送る会

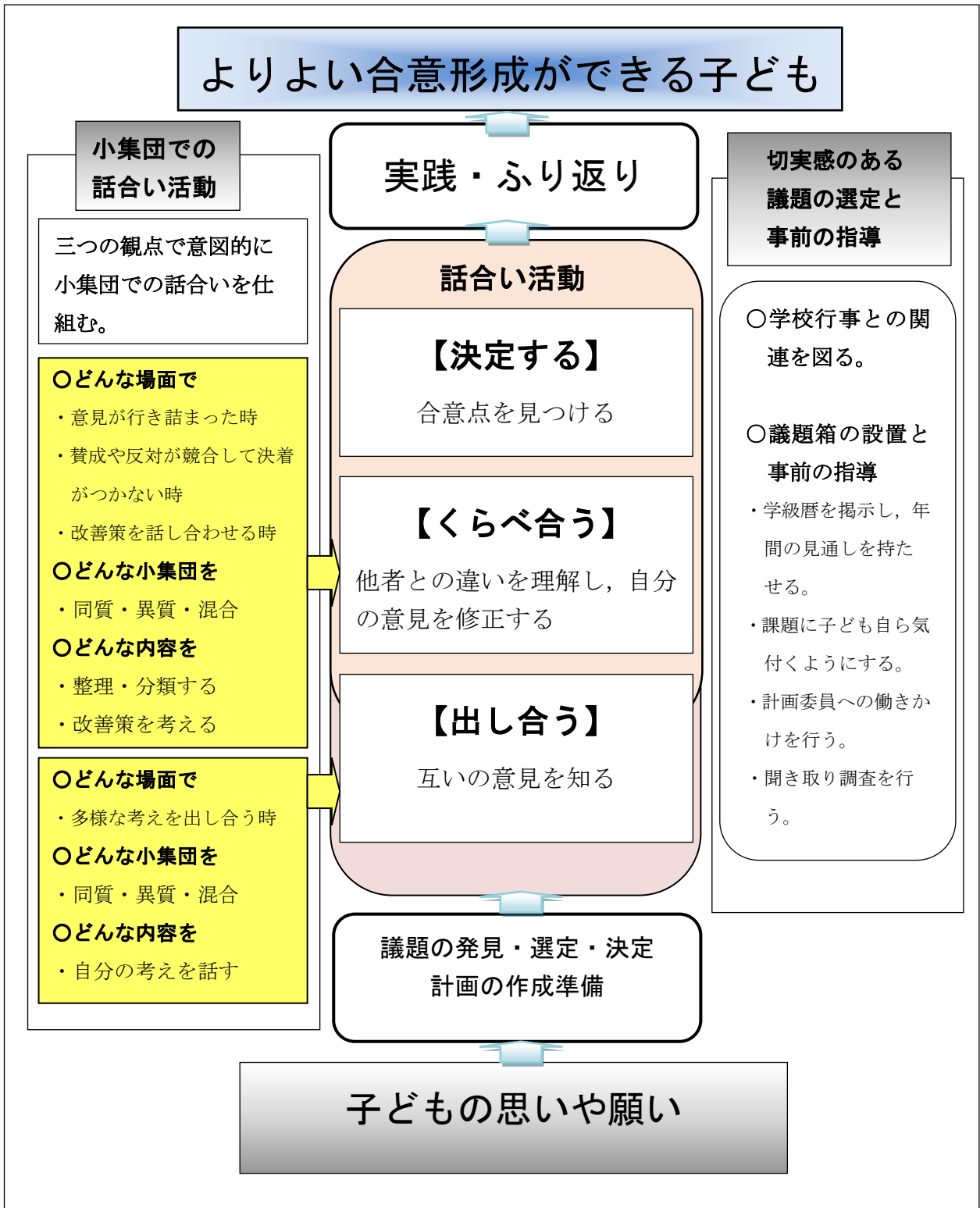
②議題箱からの議題の選定と事前の指導

児童自らが自分たちの学級の生活上の問題に気づくことができれば、それは子ども達にとって切実感のある解決しなければならない議題となり得る。そこで、生活の中の問題に気づき、自主的な活動への意欲を育てるために議題箱を設置する。提案された内容の中から学級の実態や学級目標に照らして議題を選定し、提案理由を明確にする。また、話し合い活動に至るまでのこれらの計画・準備を計画委員とともに進めていくことで主体的で建設的な話し合い活動が行われるようにする。

(2) 小集団での話し合い活動の工夫

学習過程は「出し合う（互いの意見を知る）」「くらべ合う（他者との違いを理解し、自分の意見を修正する）」「決定する（合意点を見つける）」の三段階で展開し、よりよい合意形成ができるよう意図的に小集団での話し合い活動を位置づける。小集団での話し合い活動は以下の三つの観点で仕組む。

どんな場面で	どんな小集団で	どんな内容で
【出し合う段階】 ・多様な考えを出し合う時	・同質な考えの友達同士 ・異質な考えの友達同士 ・同質な考え・異質な考えの友達が混合	・自分の考えを話す （互いの考えを知る）
【くらべ合う段階】 ・意見が行き詰まった時 ・賛成や反対が競合して決着がつかない時 ・改善策を話し合わせる時	・同質な考えの友達同士 （作戦タイム） ・異質な考えの友達同士 （説得タイム） ・同質な考え・異質な考えの友達が混合 （いろいろな考えを知る）	・考えを整理・分類する ・改善策を考え、合意点を見つける

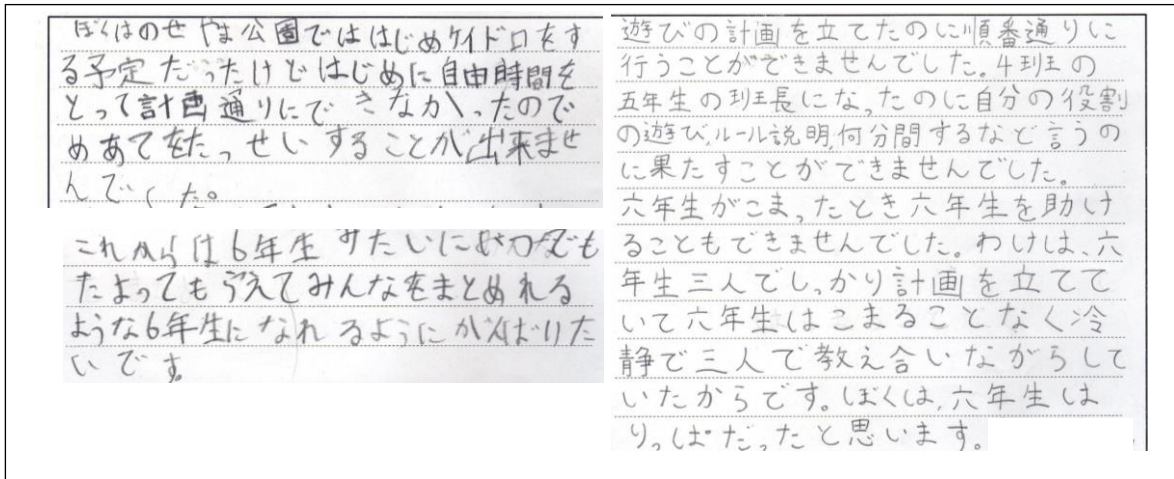


8 研究の実際と考察

【実践1】「地域のお年寄りとふれ合える祖父母交流会にしよう」の実際と考察

(1) 学校行事（チャレンジ体験活動Ⅱ）との関連について

今年度、本校では9月の「飛び出せ！GO」を6年生が、「祖父母交流会」を5年生が中心となって計画・実践を行うこととなった。「飛び出せGO！」ではお弁当を食べた後の短時間の遊びの計画を5年生に任せてもらったが、説明がうまくできなかつたり時間が余つたりと、思うように実践することができなかつた。（資料1）



【資料1 飛び出せGO！の実践後の子どもの振り返り】

そこで、うまくいかなかつた経験が課題として生かせることや、高学年として学校行事に責任を持って関わっていくことで、子どもたちにとって切実感のある議題になると考え、祖父母交流会との関連を図つた。

本時活動において「どんな場面で」「どんな集団で」「どんな内容を」話し合わせるかは、事前の計画委員との打ち合わせの中で、資料2のように位置づけた。出し合う段階では、同じ考えの友達同士で話し合うことで互いの考えを知るためである。同じ活動を選んでいても、理由が異なっている友達と話すことで考えを広げたり、深めたりすることができるからである。くらべ合う段階では、異なる考えの友達と話すことで、違う考えのよさを知り、よりよい集団決定につなげるためである。また、ここで自分の考えのよさを友達に主張したり、考えを出し合つて新たな改善策を生み出したりすることもできるからである。

どんな場面で	どんな集団で	どんな内容を
出し合う段階	同質な考えの友達同士	・自分の考えを話す。 (互いの考えを知る)
くらべ合う段階	異質な考えの友達同士 (説得タイム)	・違う考えのよさを知る。 ・自分の意見のよさを伝え説得する。 ・改善策を考え、合意点を見つける。

【資料2 本時における小集団での話し合い活動の位置づけ】

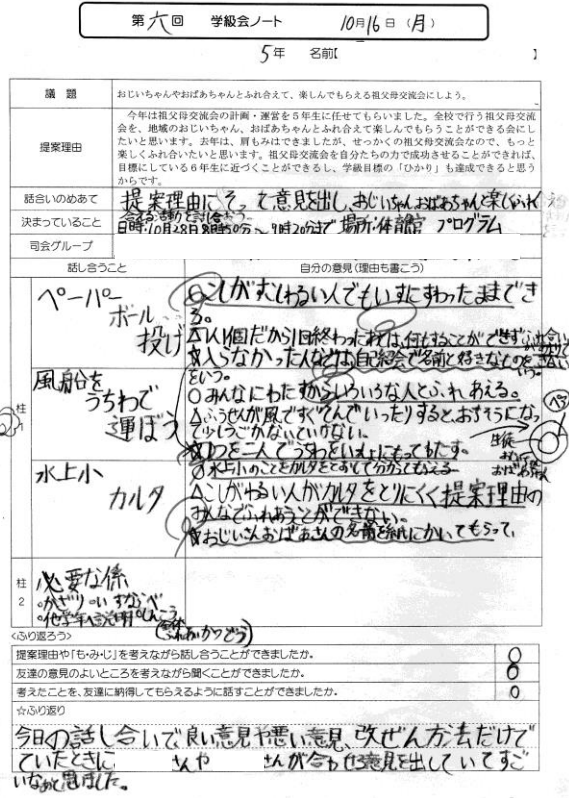
(2) 小集団での話し合い活動について

【議題】	「地域のお年寄りとふれ合える祖父母交流会にしよう」 ウ(学校における多様な集団の生活の向上)
【提案理由】	今年は祖父母交流会の計画・運営を5年生に任せてもらいました。全校で行う祖父母交流会を、地域のおじいちゃん、おばあちゃんとふれ合えて楽しんでもらうことができる会にしたいと思います。去年は、肩もみはできましたが、せっかくの祖父母交流会なので、もっと楽しくふれ合いたいと思います。祖父母交流会を自分たちの力で成功させることができれば、目標にしている6年生に近づくことができるし、学級目標の「ひかり」も達成できると思うからです。
【3つの視点】	目的性：おじいちゃん・おばあちゃんとふれ合えて楽しんでもらえるか。 相互性：1年生から6年生、地域のおじいちゃん・おばあちゃん、みんなのできるか。 現実性：自分たちで準備、実践できるか。

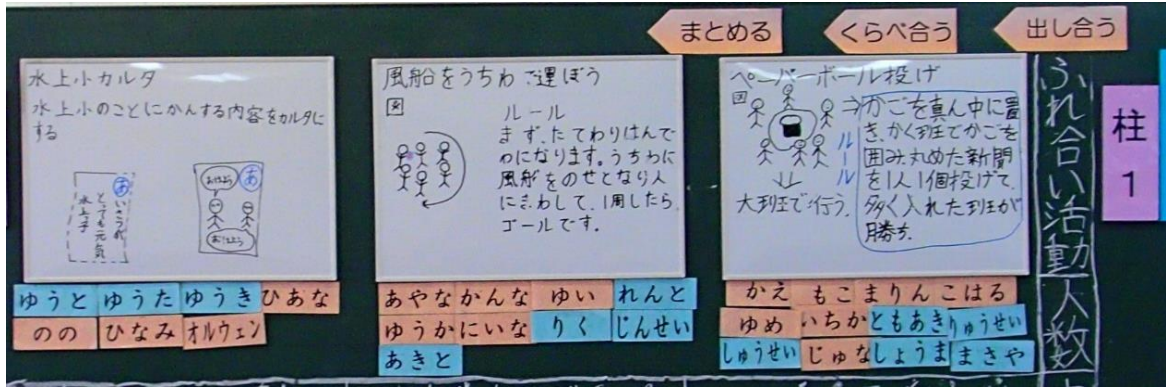
ア 出し合う段階

まず、事前に書かせた考え(資料3)をもとに、同質な考えの小集団で話す時間を設定した。互いの考えを知るため、同じ意見でも理由が多様であることから、自分の考えを強化したり広げたりするためである。黒板には誰がどの意見に賛成しているのかがわかるようにネームプレートで示し(資料4)、席もすぐに相談できるように同じ考えの友達と固まって配置するようにした。

小集団の話し合いでは、自分と同じ意見でも選んだ理由がそれぞれ違うことを知り、全体交流では多様な考えが出された。また、よい考えを持っているにも関わらずみんなの前で発言するのが苦手なE児の考えを、D児が紹介する場面(資料5)があり、全体の前小集団で話し合う場を設定したこと、一人でも多くの考えが全体の話し合いに生かされたと言える。



【資料3 E児の学級会ノート】



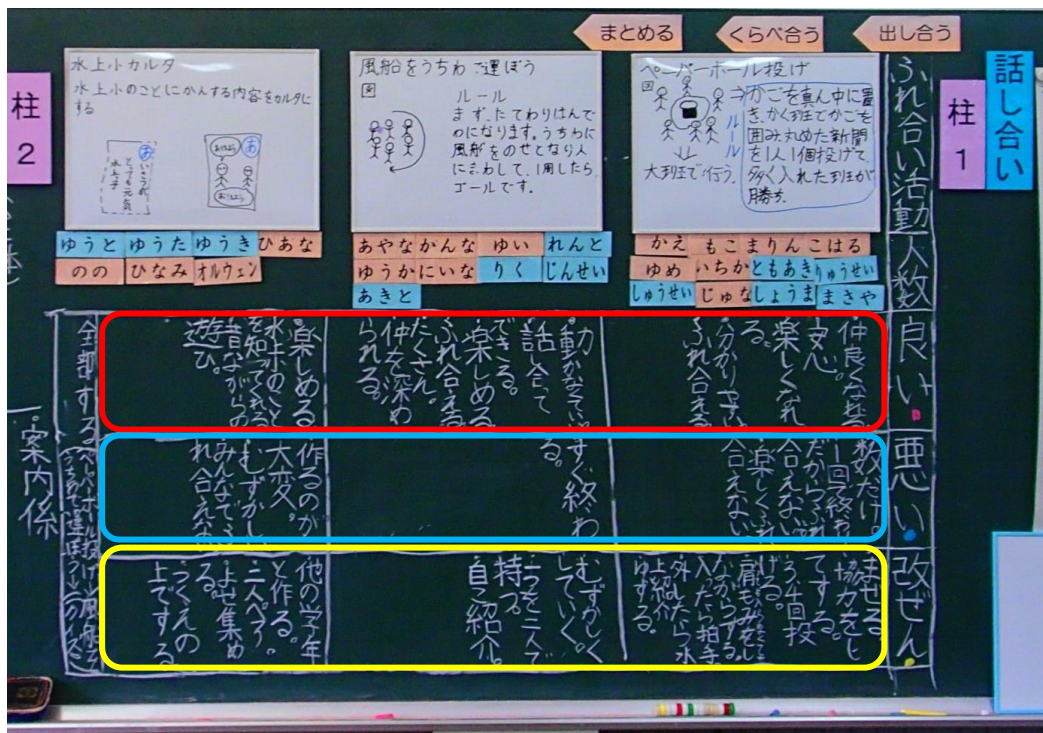
【資料4 ネームプレートを使って意見を可視化した板書】

司 会：それでは話し合いに移ります。まず自分の意見を同じ意見の人と話してください。
 【同質グループでそれぞれの活動を選んだ根拠について話す】（2分）
 司 会：ふれ合う活動について意見を発表してください。
 A児：ぼくは「風船をうちわで運ぼう」がいいと思います。わけは、おじいちゃんやおばあちゃんがいすに座ったままできるからです。
 B児：わたしは「ペーパーボール投げ」がいいと思います。わけは、仲良くなれたり応援し合ってできたりするからです。
 C児：ぼくは「水上カルタ」がいいと思います。わけは、水上小のことを知ってもらえるし、楽しんでもらえると思うからです。
 D児：わたしは「風船をうちわで運ぼう」がいいと思います。風船をうちわで運ぶのはバランスが悪いので話し合ってできるからです。グループで話した時のEさんの「風船を落としたり自己紹介を入れる」という考えもいいと思いました。

【資料5 全体の話合いでの子どもの発言】

イ くらべ合う段階

出し合う段階で出された意見について、賛成意見や反対意見を出し合った。反対意見を出す場合には建設的な話し合いになるよう改善策を考えていった。出された賛成・反対意見は板書書記の児童が分類・整理し（資料6）、友達の考えを聞いて意見が変わったときにはネームプレートを移動するよう司会の児童が声掛けを行った。



【資料6 賛成・反対意見を分類・整理した板書】

計画委員会との打ち合わせでは、異質な意見の友達と自分の選んだ活動のよさについて提案理由に照らして主張し合うことで、どの活動が今回の目的に合っているのか考えさせたり、出された気になる点についての改善策を話し合わせたりする予定であった。しかし、明確に指示を出さずに小集団での話し合い活動に入ったため「出し合う段階」と同じ内容を話している児童もいた。

小集団で話し合った後の全体の話合いでは、視点を変えるため、学級会ノートを見て事前に

把握していた考えをもとに司会が児童Fを指名した。提案理由にある「ふれ合う」ということについて焦点化するためである。児童Fの発言に対して、ルールを付け加えたり改善策を出したりしながら話し合いを進めていった（資料7）。

（賛成・反対意見がひと通り出された後）
 司会：話し合う時間を取ります。他の意見を出している人と話してください。
【異質ペア・グループで自分が選んだ活動のよさを主張する】
 司会：Fさんはペーパーボール投げとカルタはふれ合うことができないと学級会ノートに書いていました
がどうしてですか。
 F児：どちらも個人でやることなので、あまりふれ合えないと思いました。
 G児：おじいちゃんやおばあちゃんと子どもをペアにすればふれ合えると思います。
 H児：ペーパーボール投げは提案理由にあるように楽しめるけど、話し合うことはできないと思います。
うちわのだったら渡し方を話し合ったりして仲良くなれると思います。
 I児：グループでアドバイスをしたり、そういうのを話し合って協力すればふれ合えると思います。
 J児：ボールを外した人に肩もみをしてはげましたり、入ったら拍手をしたり、そうすればふれ合える
と思います。

【資料7 全体の話合いでの子どもの発言】

ウ 決定する段階

くらべ合う段階での意見をもとに、人数が若干多いペーパーボール投げに納得するためには、どのような点を改善すればよいかを司会の児童が投げかけた。フロアからは資料8のように、提案理由の「ふれ合う」という点を補強するようなルールが付け加えられていった。そこで、司会の児童が最終的な意思決定の確認を行ったが、話し合いの中心であった「ペーパーボール投げ」と次に意見の多かった「風船をうちわで運ぼう」の2つを行ってはどうかという考えが出され、全員が賛成し決定することとなった。

司会：それでは活動を決めたいと思います。ペーパーボール投げが多いようですが、反対の人はどうしたらペーパーボール投げに納得できそうですか。
 K児：ボールが外れたら自己紹介をしてもらったり、水上小のいいところを言ってもらったらいいと思います。
 L児：肩もみも入れたらいいと思います。
 M児：肩もみをしながら励ましてあげたらいいと思います。
 N児：おじいちゃんたちには外しても入れても肩もみをしてあげたらいいと思います。入ったら拍手もしたらいいです。その方がうれしいと思います。
 司会：ペーパーボール投げでいいですか。
 D児：わたしはつなげたらいいと思います。「風船をうちわで運ぼう」をしたあと「ペーパーボール投げ」をして、カルタは時間がかかるので、水上のことを知ってもらうために問題を出せばいいと思います。
 F児：ぼくも、時間的にも2つできるし、あまったら問題を出せばいいと思います。

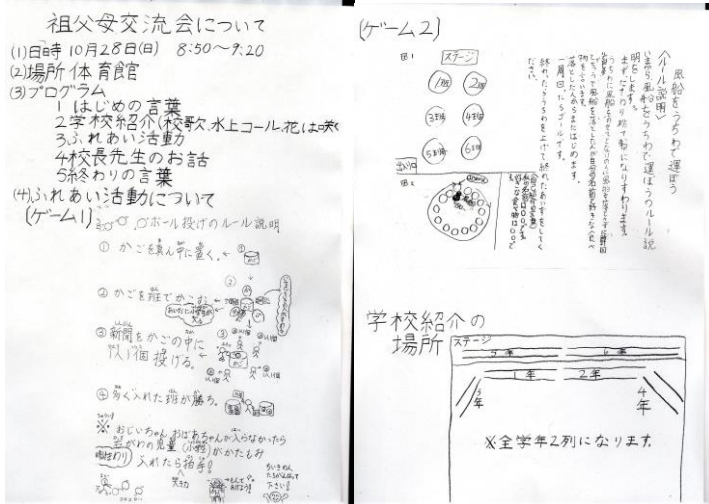
【資料8 全体の話合いでの子どもの発言】



【資料9 話し合いの様子】

エ 事後の活動

柱2で付け加わった「ご案内係」を加えて役割分担を行い、資料10の計画書を作成した。計画書をもとに先生方や他学級へ決定した活動内容の説明を行ったり、ふれ合い活動の準備、体育館の飾り付けなどを協力して行ったりすることができた。



【資料10 活動計画書】



【資料11 準備の様子】

祖父母交流会当日は、朝から係ごとに役割分担の確認を行い、体育館の飾り付けの仕上げやリハーサルを行っていた。ふれ合い活動は縦割り班での活動だったため、リーダーの6年生が随分手助けしてくれて、予定の時刻を少しオーバーしたものの無事成功させることができた。



【資料12 祖父母交流会の様子】

- ぼくは最初は「ペーパーボール投げ」はボールをただ投げるだけだからふれ合えないと思っていました。でも、みんなで話し合って肩もみをするというルールになって、おじいちゃんやおばあちゃんが笑顔になっていたからよかったです。
- 一人一人がいい会にするために考えを出したり、「これはこういうふうにしたらいいいんじゃない」と話し合ったりしたところがよかった。一番うれしかったことは、おじいちゃん、おばあちゃんの嬉しそうな顔を見ることができたことです。
- 祖父母交流会に向けて一人一人が考えて行動し、自分の係をきちんと頑張ることができました。スローガンの「ひかり」ができたと思います。
- 「ひかり」の「ひ」、一人一人が主役が達成できたと思います。5年1組のみんなががんばって、不安を持っている人がいても他の人が助けてあげたり、自分で不安をなくそうと努力したり、一人一人が主役だったからです。
- 本番の前に5年生が飾りつけをしている時に、何も言わずに手伝ってくれたり、本番も「何をしたらいい？」と聞いて下級生に指示を出し手伝ってくれたりして、やっぱり6年生はすごいと思いました。りっぱな姿は6年生だとおもいました。

【資料13 事後の感想】

考 察

- ・事前の活動で試しの活動を行い具体的なイメージを持っていたことや、計画委員との事前の打ち合わせで「必要に応じて提案理由にもどす」という確認を行っていたことが、目的意識のある話し合い活動につながったと考えられる。また、「6年生のように頼られる存在になりたい」という子ども達の思いや願いを提案理由の中に明確に示したことが、子ども達の主体的な話し合い活動を支えるのに有効であった。
- ・資料5の児童Dの発言から、普段全体の前で発表するのが苦手な児童Eが、小集団の中で自分の考えをきちんと伝えることができたことが分かる。児童Dは児童Eの発言によって、自分の考えをさらに深めていることもうかがえる。このことから、「出し合う」段階で同質な意見の友達と小集団で話し合う活動を設定したことは、主体的に話し合い活動に参加しようとする子どもを育てる上で有効であったと言える。
- ・学級会後のアンケートで「今日の決定に本当に納得しましたか？」という問いに26人中25人が「はい」と回答した(1名は「時間内に終わるか不安」と回答)。また、相手の意見に納得し考えを変えようかと迷うような場面があったと全員が回答した。記述内容には「自分が考えていなかったいい点や困る点に気付くことができた」「改善策が考えられた」「ふれ合うという点でさらにいいルールを付け加えることができた」等があった。このことから、「くらべ合う」段階で異質な意見の友達と小集団で話し合う活動を設定したことは、建設的な話し合い活動を行うのに有効であったと考えられる。

【実践2】「6年生に近づくためにステップアップ作戦に取り組もう」の実際と考察

(1) 議題箱からの議題選定について

子ども達は、祖父母交流会を無事に成功させ、自分たちの力でやり遂げた成就感と満足感を味わうことができた。しかし、事後の感想(資料13)のように、会を成功させることができたのは6年生の協力が不可欠であったという思いから、6年生にお礼を言いに行った。6年生は、「みんなが楽しくふれ合える楽しいゲームを考えていてすごいと思った。」「計画から準備までよく頑張っていた。」などと、全員が言葉をかけてくれた。そんな6年生の姿から「やっぱり6年生はすごい」「6年生に近づきたい」という思いが強くなり議題箱に提案が入った(資料14)。提案をもとに、「6年生に近づくためにはどんなことを頑張ればいいのか」という目的を明確にするために、

「自分たちのいいところ」と「6年生のすごいところ」についてアンケートをとり結果を提示した(資料15)。アンケート結果をもとに、「学校のために何かする」「一つのことを続けて頑張る」「する人だけでなく、クラス全員でやる」「ほめられなくても進んで行く」「見えない努力をする」「根気強くこつこつ頑張る」ことができるようになれば、目標にし

議題提案カード

11月20日(月) 名前()

議題
6年生をこえるためには何をすればいいのか

提案理由
6年生がいないあいだをうまくできたように感じるけれど、なにかうかうようなききをするから。

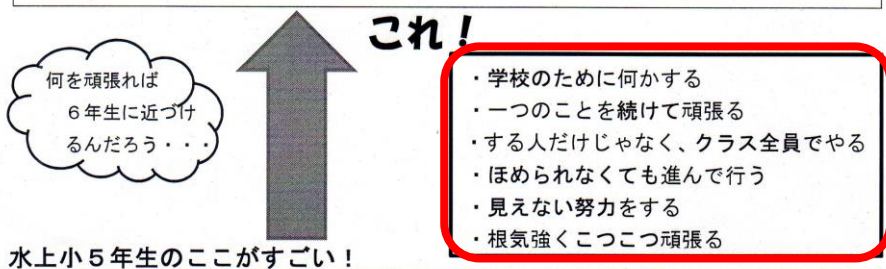
議題、ありがとうございました。

【資料14 議題箱の提案】

ている6年生に近づけるのではないかと話し合い、取り組む活動について絞り込んでいった。学校を見て回ったり、聞き取り調査を行ったりして条件に合う活動として、「運動場の草取り」「トイレのスリッパ並べ」のどちらかに全員で取り組むことが決まり、学級会で話し合うことになった。

水上小6年生のここがすごい！

- ・返事ができる
- ・先生たちがいなくても何でもできる
- ・悪い時は注意し合っている
- ・一人一人が声を出してる
- ・学級がまとまっている
- ・協力している、助け合っている
- ・どんなことにもやる気を持って頑張れる
- ・お手本になるような行動ができる
- ・先生の話をきちんと聞いている
- ・全員が発表できる
- ・あきらめない強い心
- ・反応ができる
- ・言われたことはすぐ行動する
- ・時間を守る
- ・先生たちに言われなくても考えて行動できる(体育館の床拭き)
- ・リーダーシップがある
- ・言わなくても手伝ってくれる
- ・当たり前のことをしっかりしている
- ・男女仲がいい
- ・ほめられたいという思いではなく学校のためにしている
- ・一人一人が考えて行動できる
- ・一つのことを続けられる
- ・思いやりがある
- ・いつも一生懸命
- ・下級生にやさしい
- ・臨機応変に対応できる
- ・メリハリがある
- ・いつも全力
- ・学校をよくするために頑張っている
- ・根気強い
- ・励ましてくれる
- ・学校のためにしていることがたくさんある
- ・失敗した人を責めずに助けている
- ・素直
- ・声を掛け合っている
- ・仲良しだけど自分で頑張ることは頑張る
- ・自分のことだけでなく相手のことを考えている
- ・「ひかり」ができています
- ・頼んだら絶対してくれる
- ・言ったことは守る
- ・こつこつ頑張れる
- ・人任せにしない
- ・失敗を次に生かせる
- ・大きな声が出せる



水上小5年生のここがすごい！

- ・一生懸命
- ・いろいろなことにチャレンジしている
- ・男女の仲がいい
- ・頑張るときは頑張る
- ・発表を頑張っている
- ・明るい
- ・笑顔
- ・6年生をお手本に頑張っている
- ・やさしい
- ・協力できる
- ・前向き
- ・おもしろい
- ・元気
- ・外でよく遊んでいる
- ・あきらめない
- ・人なつっこい

【資料15 アンケートの結果】

本時活動において「どんな場面で」「どんな集団で」「どんな内容を」話し合わせるかは、事前の計画委員との打ち合わせの中で、資料16のように位置づけるように決めた。今回の学級会は、二つの活動から一つを選ぶ話し合いなので、出し合う段階で違う考えの友達と話す場を設定することで、互いの考えを知るだけでなく、自分の考えのよさを主張し合い相手を説得するというねらいがあった。くらべ合う段階では、二つの意見が競合することを想定して、同じ考えの友達と話し合う場を設定した。決める段階に向けて、同じ考えの友達と相手を説得する方法を考えたり、違う考えのよさを確認し合ったりするためである。

また、適宜提案理由に戻すこと、小集団での話し合いに入る前には話し合う内容をきちんと確認することを、計画委員の子ども達と事前に打ち合わせた。

どんな場面で	どんな集団で	どんな内容を
出し合う段階	異質な考えの友達同士	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えを話す。 (互いの考えを知る) 違う考えのよさを知る。 自分の意見のよさを伝え説得する。
くらべ合う段階	同質な考えの友達同士 (作戦タイム)	<ul style="list-style-type: none"> 説得の仕方を考える。 違う考えのよさについて確認する。 改善策を考え、合意点を見つける。

【資料16 本時における小集団での話し合い活動の位置づけ】

(2) 小集団での話し合い活動について

【議題】「6年生に近づくためにステップアップ作戦に取り組もう」

ア(学級や学校の生活づくり)

【提案理由】6年生が修学旅行でいない二日間、6年生のかわりに委員会活動やたて割りそうじをがんばろうと決めて取り組みました。でも、自分たちも不安だったし、下級生の様子もいつもとちがっていました。あらためて、6年生のようにいてくれるだけで安心するようたよれる存在になりたいと思いました。そのためには、6年生のようにみんなで声をかけ合って学校のためになることをこつこつがんばることができれば、目標にしている6年生に近づくことができるし、学級目標の「ひかり」も達成できると思うから提案しました。

【3つの視点】目的性：ステップアップできる活動か、継続して毎日取り組める活動か

相互性：みんなでできるか

現実性：自分たちだけで準備・実践できるか。

ア 出し合う段階

全体で話し合う前に、異質な意見の友達とグループで話し合う時間を設定した。今回の学級会は、「草取り」と「トイレ」の二つの意見から一つを選ぶ話し合いであるため、最初にそれぞれの活動を選んだ理由を話し、活動の良さを主張し合うことが目的であった。

グループでの話し合いでは、資料17のように違う意見の友達の考えを共感的に受け止め、互いの考えの共通点を見い出したり、活動の内容を広げたりするグループも見られた。全体の場で発表するのが苦手なB児も、グループの中では自分の考えをしっかりと伝えることができた。

グループでの話し合いを受け、全体の話し合いでは、資料19のように「学校のためになる」「続けることができる」「こつこつ」「学級目標が達成できる」など三つの観点や提案

A児：トイレがいいと思う。こつこつできるから。
B児：わたしは草取りがいいと思う。一人一人がこつこつできるし、6年生に近づけると思うから。
A児：学校のためにもなる。
C児：トイレがいいと思う。トイレットペーパーを三角折りにすると使いやすいし、自分がしたら気持ちよかった。トイレットペーパーの芯がそのままになっていたら捨てるといい。
D児：草取りは取る数や場所を考えられる。
B児：それだったら、トイレもできるね。
4人：それなら両方当てはまるね。

【資料17 異質小集団での子どもの発言】



【資料18 異質小集団での子どもの様子】

理由を根拠にしながらかえが出された。

- C 児：トイレはやることがいっぱいあるし、きれいになるし、学校のためにもなると思います。6年生は学校のためになにかしているから、6年生に近づけると思います。
- E 児：トイレは汚いだけじゃなくてくさいから、あえてみんながしたくないところを選んだ方が信頼されて、6年生みたいに頼られる存在になれると思います。
- F 児：草取りは、一人一人が続けられて、一生懸命こつこつやれば学校のためにもなります。学級目標の「ひかり」も達成できると思います。

【資料19 全体の話合いでの子どもの発言】

イ くらべ合う段階

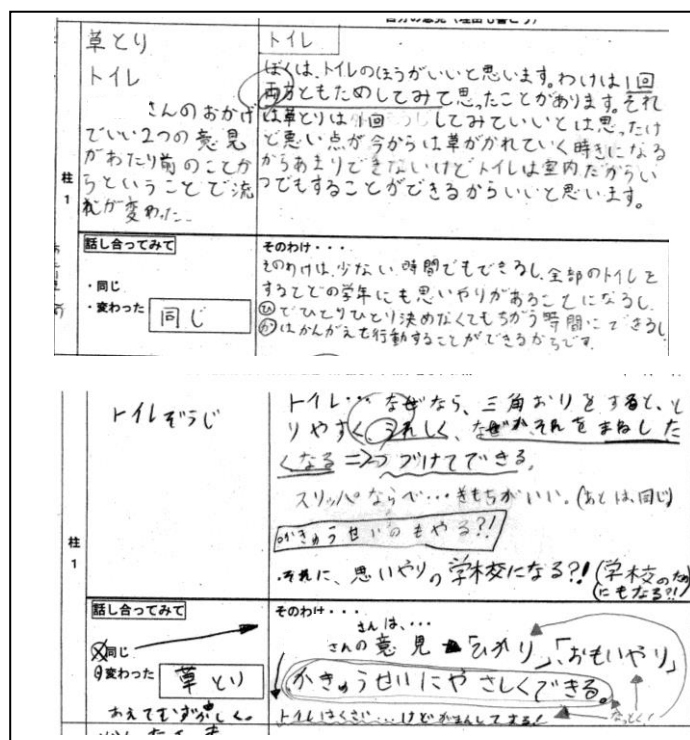
出し合う段階で出された意見について、賛成意見や反対意見、気になる点について出し合った。出された意見は、板書書記の子どもが短冊に書き、似た考えのものはまとめて貼っていった。意見がおおよそ出たところで、司会が提案理由を再度確認し、同質の意見の者同士で「どちらの活動がよりよいか」について話し合うよう指示を出した。小集団での話し合いでは、資料20のように、違う意見の友達をなんとか説得しようと、3つの観点や提案理由、学級目標を根拠にしながらかえを立てるグループもいた。H児はこのあとの全体の話合いでこのことを発表している（資料22）。

- G 児：草取りは続けることができる。休み時間とかもやれば、自分で考えて行動することになる。トイレはトイレに行ったついでにするだけやけん。
- H 児**：草取りをすれば6年生に近づける。なんでって言われたら、6年生は学校のためにしていることが多い。学校のために草取り、トイレのスリッパ並べをすれば、少しは近づけると思う。
- I 児：草取りって、運動会の時はだしになると、草がチクチクしていたいでしょ。その草を江頭先生がずっとカマで取ってくれてるやん。その草を取るのを続ければ「ひかり」が達成できる。
- G 児：3つ考えておこう。6年生に近づくと、ひかり、学校のため。

【資料20 「草取り」意見の子どもの話し合いの様子】

同質小集団で話し合ったあと、合意形成に向けて自分の考えを見直す時間を設定した。前回の学級会ノートに「話し合ってみて」という項目を設け、はじめの自分の考えからグループや全体で話し合ってみて見直した考えを書くことで、もう一度自分の考えを見つめ直すためである。

資料21は、同質小集団で話し合ったあとの考えが変わらなかった子どもと、変わった子どもの学級会ノートである。上の子どもは考えは変わらないが、「トイレはいつでもできる」という理由に「思いやり」や学級目標の「ひ」（一人一人が主役）と



【資料21 学級会ノート】

「か」(考えて行動できる)が加わり、理由が強化されたことが分かる。下の子どもは、もともとトイレを選んでしたが、小集団での話し合いのあと「あえて難しい方にチャレンジすることで学級目標が達成できる」という理由で草取りに意見を変えたことが分かる。これは、小集団での話し合いを設定したからだと考えられる。

小集団で話し合ったあとの全体の話し合いでは、どちらも提案理由や学級目標達成に向けた良い活動であることを認めながら、「当たり前のことをできるようになる」「あえて難しい方に挑戦する」という二つの考えに絞られていった。このような考えに絞られていったのは、4月当初から抱き続けている6年生への憧れと、議題提案カードの「6年生をこえるために」という言葉が表している子ども達の思いが、提案理由として全員に共通理解されているからであると考えられる。

- H児**：GとIと話し、トイレも草取りもどっちもいい意見だけど、運動会の時にみんな草がチクチクして痛いと言っていて、草を取れば学校のためにもなるし、こつこつ続けられるから、草取りはそこが提案理由に合っていると思います。
- G児**：草取りもトイレもいい意見だと思います。草取りだと「ひかり」が全部できていて、トイレだと学校のために自分たちでできるからです。でも、今回はトイレの方がいいと思います。今回はトイレをみんなでやって草取りを個人でやるといいと思います。
- E児**：草取りもいいと思ったけど、トイレには草取りとは違うものが入っていて、トイレは次の人のためにやるから思いやりのリレーになると思います。次の人のためにやるということを考えればトイレがいいと思います。
- J児**：Kさんと話をして、いいなと思ったことがあります。草は目立つところにも目立たないところにも生えていて、どこをするか自分で考えてすれば、スローガンの「考えて行動する」が達成できるということです。
- L児**：Kさんの話をJさんから聞いて、一度トイレに変わろうとしていたけど、やっぱり草取りがいいと思いました。6年生のように細かいところでもできるようになれば6年生に近づけると思ったからです。
- G児**：提案理由は、学校のためになることと「ひかり」を達成することの二つにまとめられると思います。トイレは両方に当てはまっているから、今回はトイレがいいと思います。
- M児**：6年生は当たり前のことできているし、トイレは当たり前のことだと思います。草取りは当たり前のことではないから、草取りをみんなでやるといいと思います。
- N児**：5年生の使うトイレのスリッパが並んでいませんでした。ぼくたちはまず当たり前のことできるようにならないといけないと思います。できるようになったら草取りをしませんか。
- L児**：当たり前のことからやるっていうのもいいと思うけど、あえて難しいことに挑戦するのもいいと思います。あえて難しいことにチャレンジすれば、目標にしている6年生に近づけると思います。

【資料22 全体の話し合いでの子どもの発言】

ウ 決定する段階

これまでに出た考えを整理するために、似た意見をまとめ、「提案理由」「もみじ」「ひかり」の観点で板書を整理し直した。すると、どちらの活動も全ての観点到てはまるのが分かり、「より学校のためになるのはどちらか」という観点で見直すことにした。子ども



【資料23 分類・整理した板書】

たちは、6年生の姿やどんな学校にしていきたいのかも考え合わせながら意見を述べていった。資料24のL児の「当たり前ことができなければ学校のために何かするのは難しい。」やO児の「みんなは思いやりのある学校にしたいと言っていた。トイレならできる。」という発言により、トイレをきれいにする活動に取り組むということに決まった。全員が納得した上で一つの活動に決めることができたことは、よりよい合意形成の姿であるといえる。

- I 児：草取りのよさも分かります。陸上記録会や運動会の練習でだけがをする人がいるし、行事で使うことも多いから、自分たちで自分たちが使う場所をきれいにすればみんなのためになると思います。でも、ぼくたちは、当たり前前（あたりまえ）のことがまだきちんとできていないから、やっぱり身近なトイレから始める方がいいと思います。
- L 児：当たり前前（あたりまえ）のことができなければ、学校のために何かすると言うことはよけいに難しいと思います。
- O 児：わたしも、やっぱりトイレがいいと思います。提案理由に学校のためになることと、こつこつ頑張ると書いてあるので、トイレだと学校のためになることをこつこつ頑張れると思うからです。みんなは、思いやりのある学校にしたいと言っていました。トイレだと使う人のことを考えるので、思いやりのある学校にできると思ったからです。

【資料24 全体の話合いでの子どもの発言】

エ 事後の活動

資料25のように、学級会での決定に基づいて、子ども達は分担を決めステップアップ作戦に意欲的に取り組んでいる。気づいたことなどを書き込む表（資料26）を使って、互いの取り組みやトイレの様子、他学年の反応を報告し合っている。なかなかよくなるならないという報告があると、自分の担当場所以外でも近くを通りかかったときに見に行く子どももいた。スリッパがきれいに並んでいたり、トイレットペーパーの三角折りが夕方まで続いていたりすると、うれしそうに帰りの会で報告し合っている。



【資料25 活動の様子】

ステップアップ作戦 「ひ・か・り」かがやけ！5年1組

日付	場所	担当者	内容	結果	他学年の反応	感想
1/15	7か所のトイレのスリッパ	カ	3か所のトイレのスリッパをきれいにしました。	きれいになりました。	体育館のトイレもきれいにしました。	みんながきれいになりました。
1/18	3か所のトイレのスリッパ	カ	3か所のトイレのスリッパをきれいにしました。	きれいになりました。	体育館のトイレもきれいにしました。	みんながきれいになりました。
1/19	3か所のトイレのスリッパ	カ	3か所のトイレのスリッパをきれいにしました。	きれいになりました。	体育館のトイレもきれいにしました。	みんながきれいになりました。
1/20	3か所のトイレのスリッパ	カ	3か所のトイレのスリッパをきれいにしました。	きれいになりました。	体育館のトイレもきれいにしました。	みんながきれいになりました。
1/21	3か所のトイレのスリッパ	カ	3か所のトイレのスリッパをきれいにしました。	きれいになりました。	体育館のトイレもきれいにしました。	みんながきれいになりました。
1/22	3か所のトイレのスリッパ	カ	3か所のトイレのスリッパをきれいにしました。	きれいになりました。	体育館のトイレもきれいにしました。	みんながきれいになりました。

【資料26 ステップアップ作戦報告表】

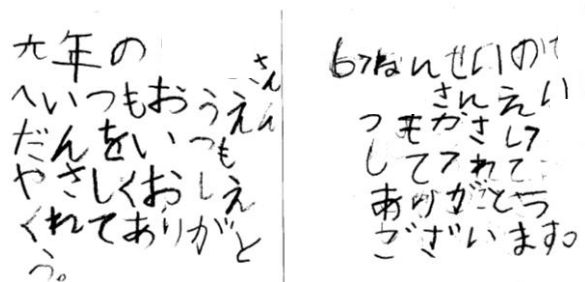
考 察

- ・課題が4月から持ち続けている6年生に近づきたいという思いや願いのこもった議題箱への提案であったことや、事前の活動で課題を明確にしていたことも、子ども達が主体的に話し合い活動に参加した理由であると考えられる。
- ・学級会後の子どものふり返りの中に「どちらもいい意見を出して迷うことが多かった。一つに決めることの難しさを知った。でも、一つに決めることができたので成長できたと思う。」というものがあつた。この子どもは、自分と違う考えを素直に受け入れ、意見を変えることができた自分の成長を実感できている。計画委員との事前の打ち合わせで、一つに決める話し合いを仕組んだことは、建設的に合意形成する力を育てる上で有効であったと考えられる。
- ・「出し合う」段階では、提案理由や3つの観点に沿って互いの意見のよさを認め合う話し合いができていた。出し合う段階で異質な意見の友達と小集団で話し合う活動を設定したことは、建設的に話し合い活動を進めようとする子どもを育てる上で有効であったと言える。
- ・「くらべ合う」段階では、同質な意見の友達と、意見の違う相手を納得させるために具体的な事例を取り上げて作戦を立てるなど、よりよい合意形成に向けて主体的に話し合いに参加している姿が見られた。学級会後のアンケートでは、全員が今回の学級会の決定に納得したと答え、小集団で話し合うことを通して自分の考えをしっかりと伝えることができた上での合意形成であったからだと考えられる。ただし、同質な意見の友達と話し合うことで自分の考えに固執してしまう子どもも見られた。互いの意見のよさを比べ合う視点を提示する必要があつた。

【実践3】「1年生と楽しくふれ合える会をしよう」の実際と考察

(1) 議題箱からの議題選定について

進級し6年生になった子ども達は、昨年度からの6年生へのあこがれを持ち続け、『ひかりになれ！かがやく6年1組』（か：考えて行動できる，が：学校のために，や：やれることに力をぬかない，く：クラスで協力）という学級目標を設定した。5月に行われた運動会では、競技や演技だけでなく、係の仕事にも責任を持って取り組んだ。応援合戦では、6年生全員が応援団として下級生としっかり関わりながら練習を進めることができた。特に1年生とは昨年度の保育園訪問から交流を始め、6年生になってからは入学式、歓迎遠足、運動会でも応援団やペア学年競技を通して多くの場面で関わりを深めてきた。さらに、運動会をやり遂げた子ども達は、運動会後のふり返りの中の「6年生はすごい」「あんな風になりたい」という1年生の言葉で、自分たちの成長を実感できたようだ。「運動会が終わると自分達に成長を実感させてくれた1年生との関わりが少なくなる」という議題箱への提案を受け、「1年生と楽しくふれ合える会をしよう」という議題で学級会を行うこととな



【資料27 1年生の運動会後のふり返りカード】

った。

本時活動の柱1で話し合う「ふれ合い活動の内容」については、子ども達からアイデアを募り、事前に試しの活動を行って2つに絞り話し合いを行うことにした。また、「どんな場面で」「どんな集団で」「どんな内容を」話し合わせるかは、事前の計画委員との打ち合わせの中で、資料28のように位置づけるように決めた。出し合う段階では、同質な考えの友達と話す場を設定した。互いの考えを知るだけでなく自分の考えのよさを広げ、全体での話し合いへの足掛かりとするためである。くらべ合う段階では、二つの意見が競合することを想定して、異質な考えの友達と話し合う場を設定した。決定する段階に向けて、自分と違う考えのよさを伝え合うことで折り合いをつけやすくし、よりよい合意形成を図るためである。

どんな場面で	どんな集団で	どんな内容を
出し合う段階	同質な考えの友達同士	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えを話す。 自分の考えのよさを広げる。
くらべ合う段階	異質な考えの友達同士 (歩み寄りタイム)	<ul style="list-style-type: none"> 違う考えのよさを知る。 相手の意見のよさを伝え合うことで、改善策を考え、合意点を見つける。

【資料28 本時における小集団での話し合い活動の位置づけ】

(2) 小集団での話し合い活動について

<p>【議題】 「1年生と楽しくふれ合える会をしよう」 ウ(学校における多様な集団の生活の向上)</p> <p>【提案理由】 初めての運動会で、一生懸命がんばった1年生。応援合戦でも、歌やふりつけ、隊形移動などしっかり覚えてくれました。また、私たちのよい所やがんばりもたくさん見つけてくれました。運動会や入学式など、1年生といろいろな活動や行事をする中で、私たちは「6年生になったなあ」という実感や成長を感じることができました。しかし、運動会も終わり、1年生との関わりが少なくなっていくような気がします。1年生とふれ合う会をすることでもっと仲良くなれるし、1年生に楽しんでもらえる会にできれば学級目標にも近づけると 생각합니다。そして、お互いに成長していけたらいいと思います。お互いに成長していけたらいいと思提案しました。</p> <p>【3つの視点】 目的性：1年生とふれ合えて楽しんでもらえるか。 相互性：お互いに成長できるか。 現実性：自分たちで準備、実践できるか。</p>

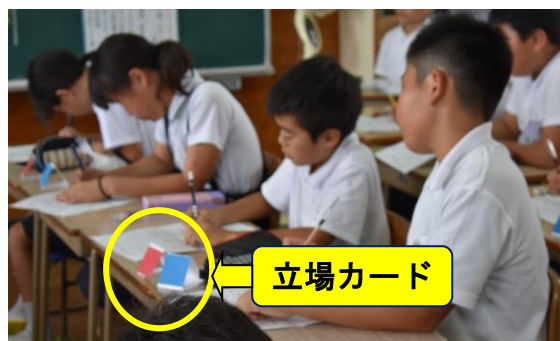
ア 出し合う段階

資料27は事前に書かせた学級会ノートである。資料の児童は、Bの活動を選んでいるが、Aの活動のよさを認めつつ、提案理由に照らして相手を納得させようとする意見を書いている。学級会ノートからも、考えの異なる友達の考えを受けとめる様子が見られるようになった。また、自分がどちらの活動を選

話し合うこと	自分の意見(理由も書こう)
【どちらの活動がよいか】	
A 風船運び	わたしは、しきものをひっくり返せがいいと思います。理由はAの風船運びもいいと思うけどBのしきものをひっくり返せは、みんなが協力できて手をぬかずにできることか、できるからです。そして実際にやってみると風船運びは、4人でやるから1年生2人としかふれ合うことか、7人きりいってしきものをひっくり返せば、いろんな1年生とふれ合えると思、だからBのしきものをひっくり返せがいいと思いました。
柱1	

【資料29 学級会ノート】

んでいるか示すために、今回は机の上に立場カードを提示させた（資料30）。小集団の話し合いでは、この立場カードを見て同質の考えの友達を見つけ、選んだ理由について話し合わせた。学級会ノートから事前に把握していた意見では、Aの活動を選んでしたのは7人、Bの活動を選んでしたのは22人と人数に差があったが、小集団での話し合いで同質の考えの友達と話し合う場を設定したため、全体での話し合いの際はAを選んだ全員が手を挙げる事ができていた。



【資料30 立場カード】

イ くらべ合う段階

ここでは、賛成意見や反対意見を出し合い、それぞれの活動について意見が出されたところで、自分とは異なる活動を選んだ友達と「相手の活動のよさ」について小集団での話し合いを行った。Bの活動を選んでいる子どもが多いため、資料31のように小数意見であるAの活動のよさについて、「1年生の立場で」「提案理由から」「学級目標達成に向けて」という観点で話し合いが進むグループが多く見られた。自分の考えに固執せず、相手の考えを受け入れ、「みんなにとって(1年生にも6年生にも)よりよいもの」を選ぼうとする姿勢が見受けられた。



【資料31 立場の違う友達と話し合う子どもの様子】

P児：Aの活動はルールが簡単でいいよね。でも、1年生にとってはいいけど、私たちには物足りないかも。
 Q児：その点、1年生も6年生もBは同じくらいでやれる。
 P児：うん、でも簡単っていうのはいいと思う。
 R児：Aは声掛けもできる。
 S児：それは、Bもできるよ。
 R児：それに、Aは自分のグループが終わった後も応援できる。応援する6年生の姿を見て1年生も成長できる。待っている姿も。
 Q児：Aは学級目標に近づけるね。

【資料32 「相手の活動のよさ」について小集団で話し合う様子】

異質集団で話し合った後に、Aの活動からBの活動へ立場を変えた子どもが多かった。資料33の子どもはどちらの活動にもそれぞれよさと改善点があるが、小集団での話し合いを行ったことで、学級目標に照らしてAの活動に立場を変えていることが分かる。

小集団で話し合った後の全体での話し合いでは、立場カードを見て立場が変わった子どもから司会が指名し話し合いがスター

話し合うこと	自分の意見（理由も書こう）
【どちらの活動がよいか】	A...〇 <u>協力をして、風船を運ぶことができる</u> △ <u>声かけができる1年生は走事が好き?</u> △どこまで新聞をゆめをいいかげ分からない
A 風船運び	
⑧ しきものをひっくり返せ	B...〇 <u>皆と話し合い協力ができる仲間になれる</u> 。 △ <u>ためしてや、たとき、足かきものから出ていたら、相手などが「出る-」など責めていた人</u> がいた。 △おもしろい
柱	
話し合ってみて	そのわけ...1年生は走ることが好きだし、1年生にとっても、 <u>楽しい、簡単?</u> B=むずかしい A=成長が互いに行ける おかわりでも、あうんが、できる 学級目標に近
・同じ	
・変わった	変わった

【資料33 立場を変えた子どもの学級会ノート】

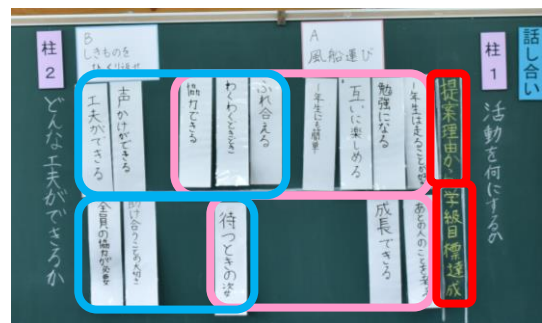
トした。資料34のように、もともとBの活動を選んでいただけの子どもが、小集団での話し合いを行ったことで、自分とは違う活動を選んだ友達の考えのよさに気づき、1年生の立場に立って考えたり（T児）、提案理由の「お互いに成長できる」という観点に照らして意見を述べたり（V児）することができるようになっていく。

T児：AもBも同じようにふれ合えるけど、ルールが1年生にとってAの方が簡単だから変えました。
 U児：それに、Aだと1年生も思いきり遊べると思います。
 V児：Aだと1年生も6年生もみんな楽しめると思います。それに、待っている時間も応援すれば、された人も頑張ろうと思うし、待つときの姿を見せると1年生も成長できると思います。

【資料34 全体の話合いでの子どもの発言】

ウ 決定する段階

板書（資料35）をもとに、司会の子どもが「提案理由」と「学級目標達成」の観点で意見を整理し、どのような決め方をするか投げかけた。資料36は、本学級の子ども達がかねてからの学級会を通して身に付けてきた折り合いのつけ方である。「AとBにはそれぞれよさがあるが合体させることは難しい。」「どちらも提案理由や1年生のことを考えて、これがいいと考えて提案した活動であるので、この2つのうちどちらかを選びたい。」という意見が出され、①の決め方をするようになった。「自分がしていない時でも応援する姿や待つ姿で立派な姿が見せられる」（W児、X児）、「あとの人につなぐために考えて行動する」という学級目標が達成できる」（Y児）という意見が出され、考えて行動できることは6年生の成長につながり、自分たちのそんな姿が1年生の成長にもつながるという理由でAの活動を行うことに決定した（資料37）。



【資料35 分類・整理した板書】

決める方法

- ① AかBか、どちらか1つを選ぶ。
- ② AとBのどちらもやる。
- ③ AとBを合体させる。
- ④ どちらかの意見を中心にして、もう1つの意見のよさを付け加える。
- ⑤ AとBの発想を生かして新しいものを作り出す。

【資料36 折り合いのつけ方】

司会：Aはあとの人につないでいって、みんなでゴールを目指します。Bはチーム全員で協力しないとやりとげられません。どちらが提案理由や学級目標により合っていますか。
 W児：1年生のおかげで、6年生になったという実感や成長を感じることができました。だから、今度は私達が1年生のためになることをしたいと思います。それに合うのはAだと思います。立派な姿が見せられると思うからです。
 X児：Aは声かけや待つ姿など、Bにはできないことができるよさがあると思います。
 Y児：Aはあとの人につないでゴールするために、学級目標にある「考えて行動する」が達成できると思います。

【資料37 全体の話合いでの子どもの発言】

エ 事後の活動

学級会で話し合ったことに基づいて、朝の会等を利用して役割分担を行い、ふれ合う会の準

備、練習に意欲的に取り組んだ。会当日は、学級会の中でも出てきた「待っている間も一生懸命応援する姿を見せる」ということを意識し、6年生としてお手本になれるような立派な姿を見せてくれた。1年生の「楽しかった」「またやりたい」という感想を聞いて、一度で終わらず継続して関わっていききたいという思いを強くした（資料39）。



【資料38 ふれ合い会の様子】

- 自分たちで話し合っただけで決めたことをやって、自分も楽しかったし1年生が楽しんでくれているのを見てうれしかった。次にしたいことがたくさん浮かんできた。
- ふれ合う会をむかえるまでに、自分たちで考えて行動することができた。自分たちの成長を感じることができた。
- ゲーム自体も楽しかったし、ゲームの時の待ち方や応援すると相手もうれしいということを教えられたのではないと思う。
- 1年生とふれ合うことを通して、自分たちも成長しているんだと改めて思った。

【資料39 事後の感想】

考察

- ・課題が「自分たちに成長を実感させてくれた1年生とともに成長していきたい」という思いや願いのこもった議題箱への提案であったことや、事前の活動や聞き取り調査で課題を明確にしていたことで、子ども達が主体的に話し合い活動に参加することができたと考えられる。
- ・「出し合う」段階では、提案理由や学級目標達成に向けてという観点に沿って互いの意見のよさを認め合う話し合いができていた。これは、事前の活動で実際にそれぞれの活動を体験したことで、互いの活動のよさが共有できていたからと考えられる。また、出し合う段階で同質な意見の友達と小集団で話し合う活動を設定したことは、同じ活動を選んでいても多様な考えがあることを知ることで自分の考えを広げたり、少数意見の立場でも自分の考えに自信を持ち、意欲的に話し合い活動に参加させたりする上で有効であったと言える。
- ・「くらべ合う」段階で、異質な意見の友達と相手の意見のよさを伝え合うことで、再度提案理由や学級目標達成という観点に立ち返って自分の考えを見直すことができていた。また、相手の考えのよさを受け入れ、納得して自分の考えを変えることができていたことから、少数意見を生かし建設的な話し合いを行う上で有効であったと考える。

9 全体考察

(1) 議題の選定と事前の指導について

実践1、実践2、実践3の取組を通じて、小集団での話し合い活動を下支えするものとして

事前の指導が不可欠であることが明確になった。事前の指導において特に有効であったのは以下の3点である。

① 切実感のある議題の選定を行う

学校行事との関連を図ることや、議題箱の提案カードから話し合う価値のある議題を選定することで、主体的な話し合い活動につながったと考える。その際、提案理由に課題と子ども達の思いや願いを明確に示したことも、目的意識のはっきりした話し合い活動を行う上で有効であった。

② 活動の具体的なイメージを持たせる

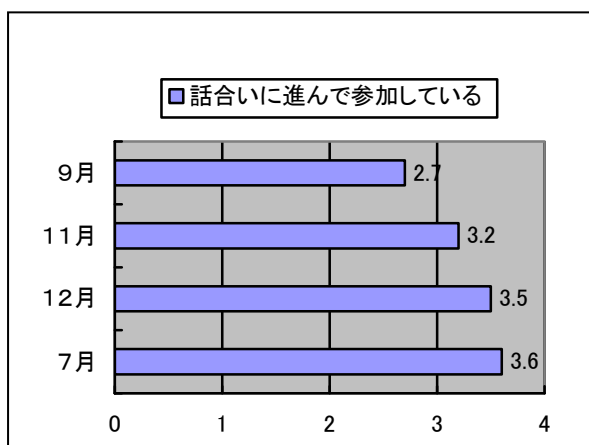
学級活動(1)を行う前に聞き取り調査と試しの活動を行った。このことで、活動の具体的なイメージを持つことができ、話し合いの3つの観点（も：目的性，み：相互性，じ：現実性）や提案理由に沿った話し合い活動へとつながった。

③ 計画委員との打合せ

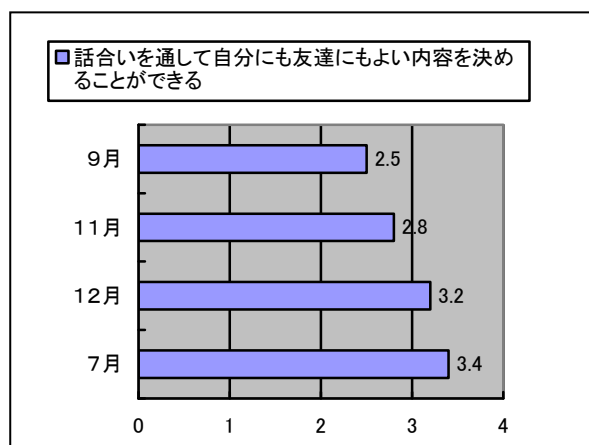
自分たちの力で運営できるようにするために、事前に計画委員との打合せを行った。「小集団での話し合いはどの段階でどのような小集団を仕組むか、どんな内容で話し合ってもらうか」「話し合いが競合したときはどうするか」「どのようにして決めるのか」など、話し合いの進行に合わせた具体的な場面を想定して打合せを行ったことで、多数決に頼らないみんなが納得する決定につながったと考える。

(2) アンケート結果から

実践の前後での変容を見とるため、アンケート調査を行った。9月は実践1の前、11月は実践1の後、12月は実践2の後、7月は実践3の後に実施した結果である。アンケート項目に対し4段階で評価させ、数値は平均値で表している。



【資料40 主体性に関するアンケート結果】



【資料41 建設的な話し合い活動に関するアンケート結果】

資料40は主体性に関するアンケート結果である。平均値が上がっていることから、話し合い活動に主体的に参加している子どもが増えたことが分かる。これは、実践2（資料17）の発表することが苦手なB児が、小集団での話し合いで自分の考えをしっかりと話すことができていることから分かる。また、資料5のD児や資料22のJ児、L児の発言のように、小集団で話したE児、K児の考えを全体の話し合いの時に紹介する姿が見られた。このことで、全体の場

で発言できなくても、自分の考えが集団決定の中に生かされていることが実感できたと考えられる。これらのことから、「出し合う」段階に小集団で話し合う場を位置づけたことは、主体的に話し合い活動に参加する子どもを育てる上で有効であったと考える。

資料4 1は建設的な話し合い活動に関するアンケート結果である。平均値が上がっている。資料7・資料8のように、よりよい決定のために改善策を考えた発言や、資料20のような相手を説得するために作戦を話し合う姿、資料22の「どっちもいい意見だけど」や資料34「AもBも同じようにふれ合える」と相手の考えを受け入れた発言から建設的な話し合い活動を行い、よりよい集団決定ができるようになってきたということが言える。このことから、「くらべ合う」段階で小集団で話し合う場を設定したことは、少数意見や多様な意見を生かす建設的な話し合い活動ができる子どもを育てる上で有効であったと考える。

以上のことから、切実感のある議題の選定と話し合い活動につながる事前の指導、及び「どんな場面で」「どんな小集団で」「どんな内容で」小集団での話し合い活動を仕組むか工夫したことで、よりよい合意形成を行うことができる力を育むことができたと考える。

10 成果と課題

(1) 研究の成果

- 子ども達にとって話し合う価値のある議題を選定したことや、話し合い活動につながる事前の指導の工夫を行ったことは、目的意識をしっかりと持ち、主体的に話し合い活動に参加する子どもを育てる上で有効であった。
- 小集団での話し合い活動を意図的に仕組むことは、学級の一員として積極的に話し合い活動に参加し、よりよい集団決定につながる話し合い活動を展開する上で有効であった。また、よりよい合意形成ができる力の育成にもつながった。このことで、自分の考えが集団決定の中に生かされているという自己有用感も高まり、よりよい人間関係を築くこともできている。

(2) 今後の課題

- 小集団で話し合ったことが全体の話し合いの中に生かして活発に交流し合えるような、小集団のあとの全体の話し合い活動の場の持ち方を工夫していく。そのために、小集団で話し合った内容が全体に共有でき、よりよい合意形成のためのツールを開発していく。
- 子ども達自身が、出された意見を分類・整理し、合意形成までの道筋がイメージできるようにする。そのために、子ども達の思考・表現を可視化・操作化し、比べたり考えたりする視点を明確にした構造的な板書について工夫していく。

<参考文献>

- ・小学校学習指導要領解説 特別活動編 文部科学省 東洋館出版社 2008年
- ・特別活動指導資料 楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動(小学校編)
文部科学省/国立教育政策研究所教育課程研究センター 文溪堂 2014年
- ・自分を鍛え、集団を創る! 特別活動の教育技術 杉田洋 小学館 2013年